

# 宇都宮溪嶺会

## 冬合宿 飯豊連峰縦走

大石ダム～杵差岳～頼母木岳～西俣ノ峰～長者原

2013年12月28日～2014年1月3日 7日間

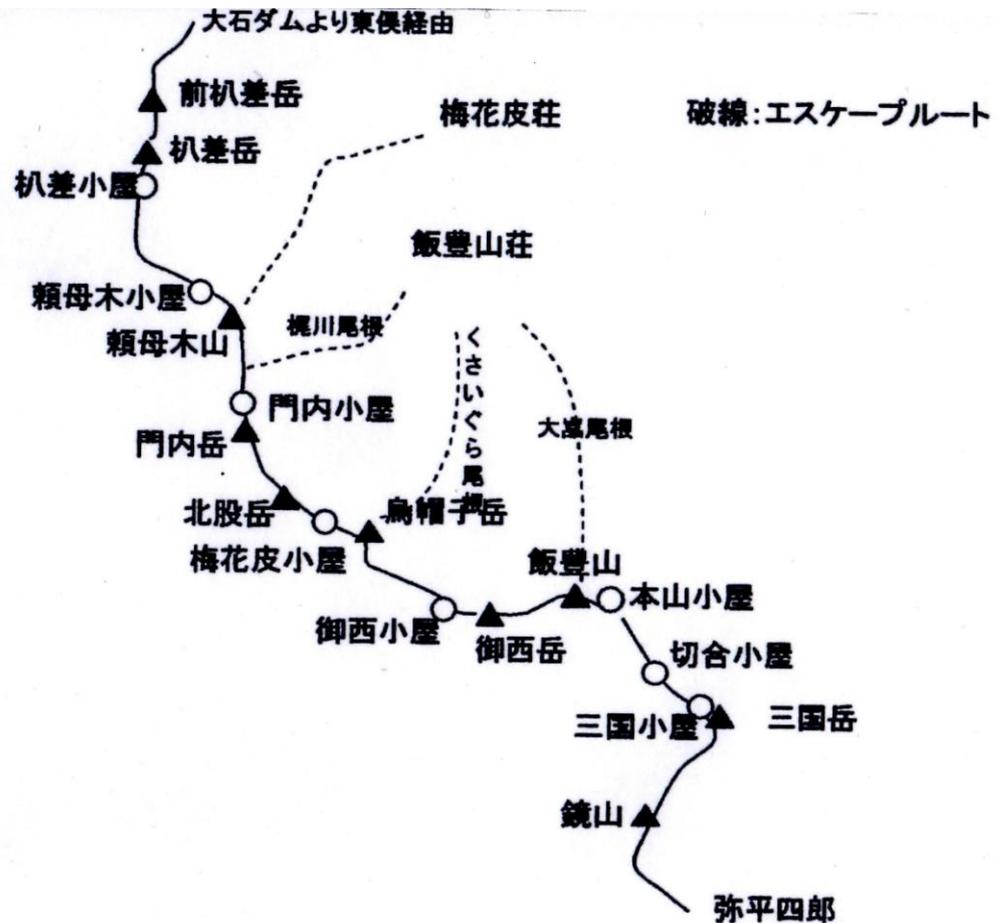
メンバー：谷嶋 真一，上小牧 憲寛，落合 聡（記録・写真）

我々の今年の冬合宿は、飯豊連峰全山縦走。

谷嶋代表が兼ねてから抱いている積年の目標である。

ルートは、大石ダム～主稜線を縦走～弥平四郎へ抜ける完全縦走。

### 概念図



飯豊連峰冬期全山縦走は、記録などを探してみても近年のものはほとんど見つけることが出来ず、昔の記録が一部確認出来るのみだ。

冬の飯豊連峰は豪雪地帯に位置し、日本海の水分をたっぷり含んだ湿雪が降り続き山登りの対象としては日の目を浴びず、俗にいう冬山のスタンダードからはかけ離れた存在だ。

近年インターネットの普及に伴い、山の情報も簡単・手軽に入手出来るようになってしまい、便利になった反面『未知なる世界』は徐々に薄れてきてしまっている。

道具や装備の軽量化など時代の進化に伴い、登山の主流が少しずつ変わり始めているのも否定出来ない。

重労働に苦しむこの手の縦走は今の時代にはお世辞にも最先端からは程遠く、ある意味取り残されてしまった『泥臭い課題』といっても言い過ぎではないだろう。

しかし、登山の本質である縦走は我々が求める最も根本的なスタイルでそれほどの山域に限らず、今の時代でもそしてこれからも決して色褪せず変わらないものだと私は思っている。

ガイドブックにあるような登山を忠実にこなせばそれで満足なのか、  
我々が求めるものは決してそんな単純なものではなく、探検的要素・未知への渴望を深く追求していきたい。  
我々宇都宮溪嶺会では、兼ねてから冬の飯豊連峰で数多くの冬合宿を行ってきたが、  
主稜線へ出れるチャンスは数年に一度と聞いていた。  
話を聞くだけでも冬期縦走が一筋縄ではいかないということは、十分承知していた。  
しかし、個人としてパーティーとしてどれだけやれるか、  
自分の実力を試すには格好の舞台だと感じ、今回私は参加を決意した。  
日程は予備日を含めて最大9日間、デポは中間地点である門内小屋へ予め食料とガスをデポした。  
メンバーは、上記に記されている3名  
前半にラッセルのサポート隊として4名（勅使河原さん、小林（晶）さん、亀井さん、小濱さん）  
下山側・弥平四郎から3名  
（阿部さん、吉高神さん、小林（た）さん）が入って頂くことになり、力強い支援を頂いた。

12月28日 曇りのち雪 大石ダム7:20～幕営地・カモス峰下部15:30

まずは除雪されていない林道をひたすら進む、雪は膝下程度でそれほど多くない。

天気は目まぐるしく変化、途中晴れ間が出たり霜交じりの雪が降ってきたり、時折雷も鳴り響いていて不安定な空模様。

途中遭遇したカモシカや猿たちもこの時期の‘珍客’に少し戸惑っていたようだ。

前半は7名でラッセルを交代しながら前進、カモス峰下部の幕営適地でテントを張り1日目終了。

食担は今回すべて筆者（落合）が担当、軽量化を図り新しいネタを用意してきたが思いの外好評で一安心だった。



2号橋を通過

12月29日 雪 幕営地6:50～幕営地13:00

急登・深雪は空身でのラッセルを交え進む、

カモス峰から上部は東面に雪庇が大きく発達してきて切れ目に注意しながら高度を上げていく。

権内ノ峰付近では雪壁に行く手を阻まれ2箇所程急斜面をトラバース、

先頭で進むスノーシュー隊は急斜面で雪を蹴りこむ事が出来ずことごとく滑り落ち苦戦。

スノーシューは浮力感があり捨てがたいが、急斜面や密な樹林帯での機動力が低く途中難儀することが多かった。

四苦八苦するスノーシュー組を余所に先頭を進む頼もしい新人の小濱さん、

ワカンで上手く難所を切り開いてくれた。

2日目は杵差岳に届くことが出来ずもう少し高度を稼ぎたかったが、

上部に出ると風も強く幕営適地に乏しいため、悩んだ挙句少し後退。

風を避けられそうな鞍部があり、千本峰より上部・1,250m 付近だっただろうか。

時間も十分あったので快適なテント場が出来上がった。



12月30日 雪 幕営地 6:50～前杓差岳 8:55～杓差岳 11:20～杓差小屋 11:40

年末サポート隊4名は空荷で前杓差岳を目指し、今日はそこで下山となる。

稜線上は風が非常に強く、時折耐風姿勢を取らないと体が持っていられる。

標高だけで言えば上高地と変わらない1,500メートル程度に過ぎない場所だが、

この厳しさは3,000メートル級に匹敵する何かを持っているようにも思えた。

山の厳しさは山域によってそれぞれで実に不思議なものだ。



前杓差岳山頂にて

前杓差岳に着いた頃にはすっかりホワイトアウト、サポート組と硬い握手を交わし我々は杓差小屋を目指した。

年末組と分かれてからすぐに核心がやってきた。

風雪の中での読図・地形の曖昧さ、ホワイトアウトで尾根と雪庇の区別がつかず何度も同じ場所を行き来する。

工夫を凝らしてきたはずのゴーグルも曇りはじめ、視界は見た目以上に悪く非常にストレスを感じながら前進。

限界ギリギリの行動だったといえるが、やっとの思いで山頂に立ち杓差小屋へ到着。

小屋は無雪期に来ると黒々として遠くからでも分かりやすい配色となっているが、小屋すべてが凍てつくようにエビの尻尾で覆われていて、目の前に来るまで小屋の存在に気づくことがなかった。



前を向くのもやっとの杵差岳山頂

杵差小屋

梯子を掘り出す、エビの尻尾が風雪の凄さを物語っている

### 12月31日 雪 杵差小屋 6:50～頼母木小屋 13:15

相変わらず稜線上はホワイトアウト、しかし昨日ほど風が強くなかったのは幸いだ。

地図・GPSを確認しながら頼母木小屋を目指す。

ホワイトアウトの中を進むのは非常に難しく神経を使い、数十歩歩いたら立ち止まりコンパスを切って前進。

ひたすらその作業の繰り返しだ。

少しコース・ロストしてしまえば斜面で深雪に足を取られ余計な体力を奪われるので、慎重にならざるを得ない。

しかし、真白で空と地面の区別がつかず、左側に雪庇があるのでと恐ろしく、

どうしてもコンパスの指示よりも右寄りを歩いてしまう。

当然ながら稜線上はザックを降ろして行動食を摂取出来るタイミングはなく、

ポケットに突っ込んだ少量のチョコやナッツで数時間の行動が辛くシャリバテ気味。

稜線上は雪が吹き飛んでクラストしているの、途中スノーシューからアイゼンに履き替えた。

しかし度々踏み抜くモナカ雪がキツイ、やはりワカン&アイゼンがいちばん有効に感じた。

予定ではデポが置いてある門内小屋まで進みたかったが、

状況を考えたらとてもこれ以上先へ進める天候ではないため頼母木小屋に滞在決定。

頼母木小屋も冬期用出入口はエビの尻尾が物凄い勢いで発達していて、

小屋の構造を知らない人がみたらどこが出入口なのか分からないくらい雪に閉ざされていた。

梯子をおおったエビの尻尾を払い、二階の入り口を開けるのに30分程度掛かったのではないだろうか。

狭い窓からもぐりこんだ小屋の中は静かで外とはまるで別世界。

小屋に入った直後は、それまで張り詰めていた気が抜けてしまってしばらく皆で呆然としていた。

この日は小屋で気象情報・サポート隊と交信する予定だったが、今回は携帯も無線も繋がらず。仕方なくここからは事前に仕入れてきた週間天気図とラジオの予報を頼りにするしかなくなった。

以前私が無雪期に訪れた時は携帯電話が使用出来たので、これは想定外のことだった。

冬期は雪で電波状況が悪くなってしまふのだろうか、詳細は未だよく分からない。

それにしても、稜線上で小屋の存在はほんとうにありがたい。

冬に入る登山者は数パーティーしかいないはずなのに、しっかりと冬期用の出入口が開放されている。

この非難小屋の存在無くして、飯豊縦走などはとても有り得ない。

小屋管理者の方達にはほんとうに頭が下がる、この場をお借りしてお礼申し上げたい。  
この時点で門内小屋に到達出来ていないということは全山縦走は不可能に近く相談した結果、  
頼母木山から西俣ノ峰を経由して長者原へ下るエスケープ・ルートを取ることに決める。  
停滞すればするほど大停滞を余儀なくされ、危険度が増すのが厳冬の飯豊連峰。  
そうと決まれば明日以降は全力で逃げモードに入る。



頼母木小屋



小屋内は非常に快適な空間

### 1月1日 風雪 停滞

小屋が軋む程の強風、ラジオの情報では冬型が強まるとの予報だったので迷わず停滞とする。

やることもなく退屈なので、午前中はトランプをしてリラックス。

ちょうど10時頃であつたらうか、風の音が少し止んだような気がして、  
樹林帯まででも下りられるようであれば下山してみようという話になり、急いで身支度を整える。

しかし、小屋の外に出てみたら案の定凄い風雪だった。

頼母木山方面へ前進を試みたが、視界は5メートル程度。

前を進む仲間の足元がやっと確認出来るくらいで突風に倒される。こりゃダメだ！と止む無くすぐ小屋に引き返す。

小屋から歩いた距離にしたら30~40m程度、その間に赤旗を2本も刺したはずだがそれが全く見えない。

ゴーグル越しにみる景色はまるで映画のなかの世界だ、

やっとの思いで小屋を見つけ出し結局コテンパに打ちのめされてまた小屋に追いやられた。

時間にしたら10分程度の出来事であつたが、まるで悪夢を見ているように長く彷徨っているように思えた。

決してナメていたわけではないが、これが厳冬の飯豊本来の姿だということを一同まざまざと思い知った。

### 1月2日 風雪 停滞

夜中は雹が降り雷も鳴り響いていた、今日も小屋を叩きつける風雪が半端ない。

諦めがつく天候により、この日は小屋から一步も外へ出ることがなかった。

風速は25メートル以上あるのではないかというくらい、台風並みの烈風に手をつけられない。

日本登山体系にも記されている『行きはよいよい、帰りは怖い』

という言葉が頭をよぎり、それがまさに現実のものになってしまったようだ。

食料・ガスは食い延ばせばまだ十分予備があつたがどれくらい長期戦になるか分からないため、

朝食は棒ラーメン1本を3人で分け、お昼は味噌汁に粉チーズをふりかけるのみ、

下界じゃ絶対有り得ないトッピングだが、その美味しさに感動して小さな幸せを発見。

ナッツをかじりウイスキーをチビりながら、箱根駅伝を聴いて一日ゴロゴロしていた。

一同、こんな寝正月もありだな。

状況自体はヒモジいが、なぜか悲観的なところは全くなく

むしろ下山したら何が食べたい、これだけは譲れないなどクダラない話で盛り上がった。

ラジオの情報では翌日冬型が一時的に緩むとの予報、チャンスは明日しかないと思い寝床につく。

メンバーは一同楽観的であったが、私は脱出前夜は今後どうなるか興奮してあまり寝付くことが出来なかった。

1月3日 曇り時々晴れ 頼母木小屋 7:30～西俣ノ峰 10:20～長者原 12:30



小屋の窓を開けると山肌がハッキリと確認出来、谷嶋さんが雄たけびを上げている。

頼母木小屋から、はじめて杵差岳が姿を現した

まずは下山ルートの尾根に取り付くため頼母木山を目指す、冬型が緩んだとはいえやはり稜線上は凄いい強風だ。

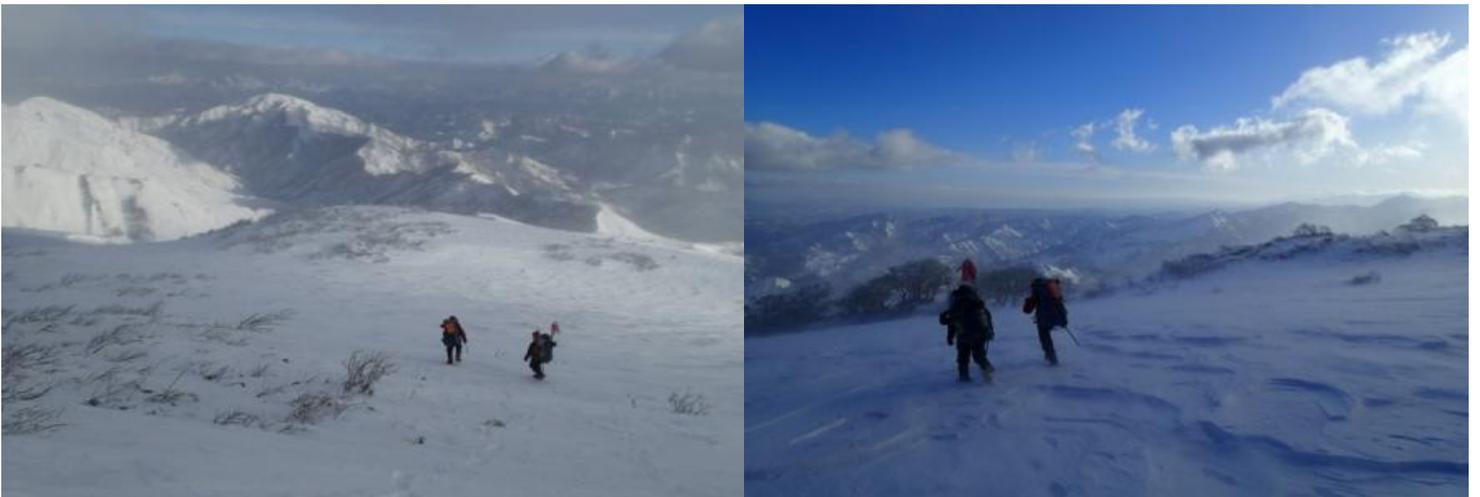
突風にも何度も倒され足も思うように上がらない。

酸素が頭に行き届いておらず、息づかいもまるで高所登山をしているかのように苦しい。

雲の流れがはやく、下山ルートもハッキリとは確認出来ない。

この稜線をホワイトアウト・風雪の中での下降を強いられたら、エスケープ・ルートもただの核心になっていただろう。

当然、GPSも雪庇の踏み抜きまでは教えてくれない。



中腹はスキーで滑りたいほど気持ちいい斜面が広がっていた

しかし、尾根が非常に広いので視界不良時はルート・ファインディングに苦勞するだろう

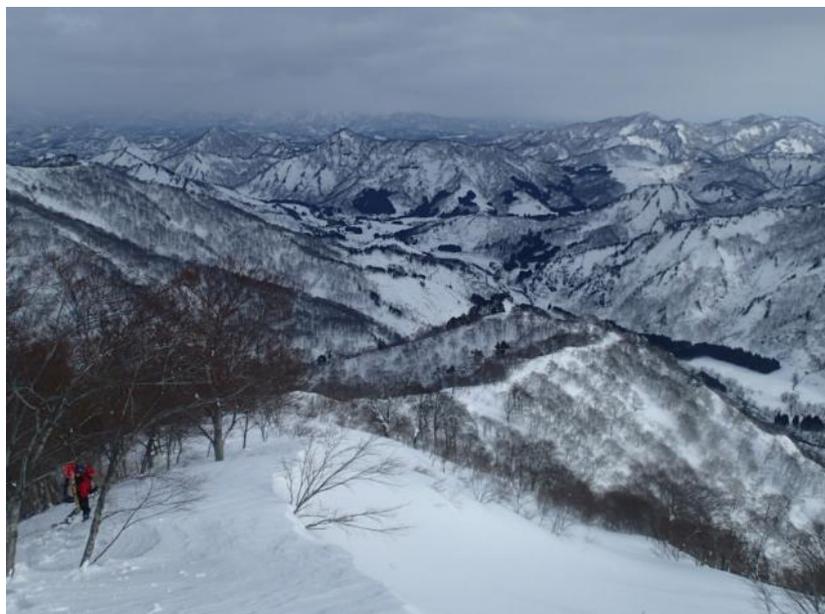


### 目指す西俣ノ峰

眼下に長者原がみえてきて、雪庇に注意しながらグングン高度を下げていく



西俣ノ峰下部から下降してきた尾根を振り返る、主稜線はもう雲の中に隠れてしまった  
小屋から上手く逃げ切るチャンスはごくわずかなタイミングだったようで  
中腹まで降りてきたら稜線の厳しさは想像出来ないくらい穏やかな天候であった  
安全圏まで降りてきてようやく一安心、そして大休止



最後は急な尾根を一気に下降して国民宿舎・梅皮花荘で一週間分の疲れを洗い流し、  
小国駅前でそれぞれ念願だったおかずをつまみにビールで一気に流し込む。

今回の飯豊冬合宿では自分の総合力を試されて、結果見事に打ちのめされた。

今の自分には何が足りなかったのか、見透かされてしまったようだ。

山行中、自分の脳内メーターがレッドゾーンに振り切ってしまう部分も何度かあった。

自分で限界を決めてしまうのはよくないかもしれないけど、

自分の限界を知るのもとても重要なことだと知った。

行き着く目標、危険と困難の違い、判断基準を確実に持ちながら

チャレンジしていくことは決して無謀ではないと飯豊で教わったような気がした。

今回は完全縦走を目標にしていただけに、成果としては絶望的な結果となった。

ただ成功や失敗という問題ではなく、

内容としては数多くのものを持ち帰ることが出来たので個人的には非常に成果が大きく成功だったといえる。

しかし完全縦走という野望は捨てきれない反面、まだやれると思った部分もある。

一度のチャレンジであっけなく成功してしまっただけは物足りないと感じていただろう。

山なんて成功したものより失敗から学ぶことのほうが数多い、停滞時はもう来年の計画を話し合っていた。

重荷での苦しいラッセル、強い精神力、地形の曖昧さ故のルート・ファインディング、

稜線の風雪の凄まじさ、深々と雪が降り続くなかでのテント生活、状況判断等

そこに華やかさはまるでなかったが、山の本質を改めて思い知った。

しかし冬の飯豊縦走とは経験したもののみが知る充実した世界が広がり、

不思議な魅力を持った山行形態だった。

まだまだこれから飯豊で色々なことを学ばせてもらおうつもりだ。